

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：12601
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：23520368
研究課題名(和文) 19-21世紀のフランスにおける詩と絵画の研究

研究課題名(英文) Poetry and image in France (19th-21th century)

研究代表者

MARIANNE SIMON・O (SIMON-OIKAWA, MARIANNE)

東京大学・人文社会系研究科・准教授

研究者番号：70447457

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、詩と絵画の深い関係を研究することで、19世紀から21世紀のフランス語資料における詩と視覚芸術との関係を考察した。絵画的な作品を主題としている作品群を分析することによって、詩はどのようにイメージを表現できるかを明らかにし、詩人と画家との共同作業の研究を進め、同じ媒体の上に詩とイメージとが同時に存在することの効果とはどのようなことであるかを調べた。最後に、視覚詩という詩と絵画の相関関係に課題を広げ、詩がそれ自体でどのように視覚的なイメージとなることについて考察した。

研究成果の概要(英文)：Poetry and image have a deep relationship. The purpose of this research was to discuss the relations between poetry and visual arts in France from the 19th to the 21st century. We examined how poems based on images translate the visual into words. We also discussed works produced by poets and artists together, and studied how the text and the image cohabit on the same surface. The last part of our research focused on visual poetry, in which the links between poetry and image are particularly intricate.

研究分野：研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：詩と絵画 視覚芸術 テキストとイメージ 視覚詩 テオフィル・ゴーチエ ピエール・アルベール＝ピロ

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、詩がイメージと常に深い関係を持っている歴史を、19 - 21世紀のフランスにおいてより詳しく調べる必要性があった。

詩人の中には、みずからデッサンや油彩画などを描く人もあり、自分の言葉で絵画の魅力を表現しようとする詩人もいた。多くの場合、詩作品が先にあり、絵画はその解釈と考えられてきたが、逆に絵画作品が先行し、詩が絵画に関する注解となるケースもある。詩はまた書物のページの上に固有の空間を占め、特別な視覚性を持っている。多くの詩的試みが、このような視覚性の効果を生むためになされてきた。

このような詩と絵画との関係にまつわる問題は、言語上のイメージ、精神的なイメージ、絵画的なイメージ、と分類することが可能であるが、現在、必ずしも深い考察の対象とはなっていないため、新たな視点から問い直す必要性があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、19世紀から21世紀のフランス語資料における詩と視覚芸術との関係を考察することである。その多様性と豊穡さを見るために、次の三つの側面から考察することを試みた。詩はどのようにイメージを表現できるか？ 同じ媒体の上に詩とイメージが同時に存在することの効果とはどのようなことであるか？ 詩がそれ自体でどのように視覚的なイメージとなることが出来るか？ つまり本研究は、絵画的なイメージを言葉によって表現する行為から、言葉の視覚性つまり文字によって絵を作るという試みまで、詩と視覚芸術との関係について多角的に考察することを目指していた。

具体的に以下のようなことを明確にしようとした。1. 絵画を主題としている詩作品においては、そこに扱われた絵画と画家とを特定すること、描写と夢想との関係の考察、絵画作品を表現するために使われる言語的イメージの分析。2. 詩人と画家との共同作業に関して：書物が制作された状況の研究、その書物におけるテキストとイメージとの関係、テキストとイメージがレイアウトされた媒体の研究。3. 視覚詩において：詩作品の視覚的形態と詩の意味との関係、レイアウト、活字の形、使用される言語システムの研究。

3. 研究の方法

本研究はこれまで別個の分野として研究が行われてきた詩と絵画を相互に関連づけることを目的とし、文献調査に加え、常に新たな視点を追求しながら国際的な研究の展開に努めた。研究の内容に関しては、特に次の点に

ついて検討を行った。

詩と絵画的な作品を主題としている詩作品においては、テキストはどのようにしてイメージを表現しているか。描写と夢想との関係を考察し、絵画作品を表現するために使われる言語的イメージを考察した。

詩人と画家との共同作業から生まれた作品の場合は、テキストとイメージはどのようにして成立したか、そして同じ媒体の上でどのようにして共存しているかを研究した。

絵画になった詩、視覚詩はどのようにして媒体や文字などの視覚性を生かしているのか。詩作品の具象的あるいは抽象的な視覚的形態と詩の意味との関係、そしてレイアウト、活字の形、アルファベットあるいはその他の文字などの、使用される言語システムを研究した。

詩と絵画の関係を明らかにするためにはグローバルなアプローチが必要であった。フランスで資料調査などを行い、フランス人の研究者を東京大学に招き、情報交換や講演会などによって積極的な国際交流を行った。

本研究の成果を公開するため、当初から論文集の制作に向けて共同研究を進めてきた。

『詩と絵』(仮題)と題した論文集は平成26年の夏に水声社から出版される予定である。

4. 研究成果

本研究の実績は、大きく分けて論文、国際交流、出版という三つの側面から成っている。本研究課題の実施中に、平成20 - 22年度本研究の科学研究費助成事業(19 - 20世紀のフランスにおける文学と絵画の関係についての総合研究、基盤C)の成果の一部として『絵を書く』と題された論文集が水声社から出版された。またアルベール・ピロ未亡人アルレット・アルベール = ピロに捧げる論文集『Poésie vivante-Hommage offert à Arlette Albert-Birot』がChampion社から出版された。このような業績も含めて以前の研究に基づき論文と論文集の発表を行った。

テーマの一つである絵画的な作品を主題としている作品群の分析という点においては、19世紀の詩人テオフィル・ゴーチエに関する研究を進め、ゴーチエとルーブル美術館の作品を中心にした論文にまとめた。日本で『テオフィル・ゴーチエと19世紀の美術』という論文集に、フランスでは『Bulletin de la Société Théophile Gautier』(テオフィル・ゴーチエ専門の研究誌)に25年中に掲載される予定である。「視覚詩」という詩と絵画の相関関係というテーマにおいては、画家をやめて詩人の道を選択したピエール・アルベール = ピロの文学的な作品を研究し、平成25年9月に中央大学で開催されたシンポジウムにおいて、アルベール = ピロの俳句について

発表し、彼の俳句の視覚性にふれた。彼の視覚詩を二つの論文で紹介し、フランス（Calliopee社）及び日本（水声社）で出版される論文集に掲載予定である。

国際交流の面においては、いくつかの講演会を主催した。平成23年の大震災の影響で平成23年度と24年度は研究者の招待はむずかしかったが、25年度には国際交流が復活し、幾つかの講演会を主催した。平成25年5月にキャロル・オルエ氏を招き、ジャック・ブレベールと絵について新たな研究が紹介された。東京大学の比較文学専門の今橋映子氏と本研究分担者の野崎歓氏の協力を得て、日仏通訳付き講演会を主催し、100人ほどの聴衆があった。7月にはエレヌ・カンペニョール＝カテル氏による二つの講演会があり、詩と絵の関係において大きな課題であるコラージュについて、そして本という媒体の中のイメージとその変貌についての発表があった。最後に、11月にセルジュ・リナレス氏を招き、ドートレモンとピカソについて意見を交換し、本研究の大きなテーマである詩人と画家との共同作業の面においては大きなヒントを得た。その他に、フランスで数名の専門家に会い、意見交換を行った。

平成20-22年度の基盤研究Cと同じように、本研究の成果を1冊の研究書に収め、公開するために、本研究に参加したメンバー及びフランス人の専門家の他に、数名の研究者に論文を依頼し、翻訳も含めて編集の仕事をを行った。26年5月に原稿を水声社に提出し、26年の夏に出版される予定である。フランス側は、エレヌ・カンペニョール＝カテル氏（パリ第3大学）、ガエール・テバル氏（パリ第3大学）、セルジュ・リナレス氏（ヴェルサイユ大学）、キャロル・オルエ氏（パリ・エスト大学）、日本側は千葉文雄氏（早稲田大学）、鈴木雅雄氏（早稲田大学）、三浦篤氏（東京大学）、塚本昌則氏（東京大学）、リアンヌ・シモン＝及川（東京大学）、合計九人による論文の記載が決定している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計51件）

- (1) 中地義和、ル・クレジオ「新たな戦争の幕開け」特集「2014年、日本の読者へ」（翻訳）『文学界』（文藝春秋社）2014年2月号、141-143。
- (2) 中地義和、「ランポーの影（ル・クレジオ『隔離の島』）」中地義和訳、筑摩書房、2013年）（書評）『ちくま』、2014年1月、p.6-7。
- (3) Nakaji Yoshikazu, 《Une parole qui se veut performative : considérations génériques sur *Une saison en enfer*》, dans *Le Genre et ses qualificatifs, études réunies et présentées par Henri Scepi, La Licorne*, n°105, Presses universitaires de Rennes, 2013, p. 227-236.
- (4) Nakaji Yoshikazu, 《De l'émerveillement à la recherche : Georges Bataille au Japon》, *Critique*, janvier-février 2013, p.124-137.
- (5) Tsukamoto Masanori, 《La conscience comme événement - une relecture de *L'Ange*》, *Forschungen zu Paul Valéry*, n°24, 2013, p. 53-70.
- (6) 塚本昌則、「「夢の圧力」ブルーストとヴァレリーにおける眠りと夢について」『思想』、2013年11月号、p.103-123。
- (7) 塚本昌則、「ヴァレリーとフロイト 奇妙なまなざしをめぐって」『思想』、2013年4月号、p. 243-261。
- (8) 塚本昌則、「「無意識」の生成とゆくえ 二〇世紀の「無意識」をめぐって」（多賀茂・塚本昌則・鈴木雅雄・立木康、座談会）『思想』、2013年4月号、p. 43-80。
- (9) 野崎歓、「映画人間のめざめ レオス・カラックス監督『ホーリー・モーターズ』」、『すばる』、2013年、第35巻第5号、p. 398-99。
- (10) 野崎歓、「個人的な詩集 動物詩集」、『群像』、2013年、第68巻第8号、p. 116-123。
- (11) 野崎歓、「雪がのんのん降る夜に 酒井耕・濱口竜介監督『うたうひと』」、『すばる』、2013年、第35巻第11号、p. 374-375。
- (12) Marianne Simon-Oikawa, Théophile Gautier, *Le Musée du Louvre*, édition présentée et annotée par Marie-Hélène Girard, Citadelles et Mazenod / Louvre éditions, 2011, 319p (書評), *Bulletin de la Société Théophile Gautier*, n°34, 2012, p. 292-294.
- (13) 中地義和、「時代に騙されない覚醒したモダン」(アントワーヌ・コンパニオン『アンチモダン 反近代の歴史』、松澤和宏監訳、鎌田隆之・宮川朗子・永田道弘・宮代康丈訳、名古屋大学出版会、2012年) (書評) 『ふらんす』(白水社) 2012年10月、p.75。
- (14) 中地義和、アントワーヌ・コンパニオン「文学は割に合う」日本フランス語フランス文学会50周年記念大会(2012年6月2日 東京大学安田講堂) (翻訳) 『群像』、2012年9月、p.148-160。
- (15) 野崎歓、「フランス文学と愛 第一章 太陽王と恋の世紀」、『群像』、2012

- 年2月号、第67巻第2号、p. 200-216。
- (16) 野崎 勲、「フランス文学と愛 第二章 快樂の自由思想」、『群像』、2012年3月号、p. 283-300。
- (17) 野崎 勲、「フランス文学と愛 第三章 感情教育」、『群像』、2012年4月号、p. 366-375。
- (18) 野崎 勲、「翻訳せよと、彼らはいう 第4回 再現芸術としての翻訳」、『文藝』、2012年春号、第51巻1号、p. 280-290。
- (19) 野崎 勲、「フランス文学と愛 第三章 感情教育(承前)」、『群像』、2012年5月号、p. 318-328。
- (20) 野崎 勲、「翻訳せよと、彼らはいう 第6回 永遠に女性的なるもの?」、『文藝』、2012年秋号、p. 280-290。
- (21) 野崎 勲、「フランス文学と愛 第五章 詩人の恋(承前)」、『群像』、2012年9月号、p. 215-227。
- (22) 野崎 勲、「フランス文学と愛 第六章 親子の愛」、『群像』、2012年10月号、p. 303-318。
- (23) 野崎 勲、「フランス文学と愛 第六章 親子の愛(承前)」、『群像』、2012年11月号、p. 299-313。
- (24) 野崎 勲、「フランス文学と愛 第七章 解放と現在」、『群像』、2012年12月号、p. 287-294。
- (25) 野崎 勲、「翻訳せよと、彼らはいう 第7回 翻訳教育」、『文藝』、2012年秋号、p. 280-290。
- (26) Nozaki Kan, 《De l'idolâtrie au dialogue : les écrivains japonais et la littérature française, *La Nouvelle Revue Française*, n°599-600, 2012, p. 130-145.
- (27) 畑浩一郎、「異国への郷愁、「出会い」の美学 テオフィル・ゴーチエ『コンスタンチノーブル』読解の試み」、『聖心女子大学論叢』第120集、2012年12月、p. 41-56。
- (28) Hata Kôichirô, 《*Le Manuscrit trouvé à Saragosse* par Jean Potocki-Essai sur les remaniements de l'œuvre》, Acte du colloque international 《Balzac et alii, génétiques croisées. Histoires d'éditions》、novembre 2012 http://balzac.cerilac.univ-paris-diderot.fr/wa_files/Hata.pdf.
- (29) Nakaji Yoshikazu, 《La poétique de Baudelaire à la lumière des *Paradis artificiels*》, *L'Année Baudelaire*, 13/14, 2011, p. 137-156.
- (30) Tsukamoto Masanori, 《Gradi del disegno. Per una poetica del sogno in Paul Valéry》(traduit par Benedetta Zaccarello), *Atque*, Nuova serie n°8/9, anno 2011, p. 161-181.
- (31) 塚本昌則、「内なる対話 ヴァレリーからベケットへ」、『仏語仏文学研究』、第42号(田村毅先生退官記念特集号)、p.155-169、2011年5月。
- (32) Tsukamoto Masanori, 《Littérature et langage indirect chez Valéry》, *Valéry et l'idée de littérature*, sous la direction de William Marx, *Fabula : la recherche en littérature*, 《Colloques en ligne》, 2011 (<http://www.fabula.org/colloques/document1418.php>).
- (33) 塚本昌則,《《La bêtise n'est pas mon fort》- la notion de bêtise chez Valéry et chez Flaubert》, 『立教大学フランス文学』, n°40, 2011年、p. 67-79.
- (34) 塚本昌則、「言葉と写真 ロラン・バルトの『明るい部屋』を中心に」、『文化交流研究』、第24号、東京大学文学部次世代人文学開発センター、2011年、p. 91-104。
- (35) 野崎 勲、「映画愛と友情の一季節」、『キネマ旬報』、通巻2403号、2011年、p.24-27。
- (36) 野崎 勲、「魔法のような文芸映画」、『エキブ・ド・シネマ』、185号、2011年、p. 8-9。
- (37) 畑浩一郎、「『サラゴサ草稿』研究序説」、『仏語仏文学研究』、2011年、巻43、p. 15-39。
- (38) 畑浩一郎、「ヨーロッパとアジアの狭間にて テオフィル・ゴーチエ『コンスタンチノーブル』(1853)」、『仏語仏文学研究』、2011年、巻42、p. 79-91。
- [学会発表](計25件)
- (1) 塚本昌則、「オートフィクションと写真 ジョナサン・リテル『慈しみの女神たち』を出発点に」、『一橋大学主催シンポジウム「生表象の近代 自伝・フィクション・学知」』、一橋大学、2014年2月2日。
- (2) Nakaji Yoshikazu, 《Mémoire et imagination dans la création littéraire》(文学創造における記憶と想像力) (J・M・G・ル・クレジオ氏との公開対談(仏語、同時通訳付) 東京大学文学部、2013年12月18日)。
- (3) Nakaji Yoshikazu, 《Rimbaud autocritique》, Università di Ca' Foscari, colloque international 《Rimbaud poéticien》, 28 novembre 2013.

- (4) Nakaji Yoshikazu, 《Lacune mémorielle et imagination réparatrice : la plénitude dans le « cycle mauricien » de Le Clézio», Université de Bordeaux 3, 22 novembre 2013.
- (5) 畑浩一郎、「私は永遠に自分について語る」～シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』をめぐって～、日本フランス語フランス文学会 2013年度春季大会(別府大学)ワークショップ「旅と文学」(コーディネーターと発表者兼任) 2013年10月27日。
- (6) Marianne Simon-Oikawa, 《Les haikais de Pierre Albert-Birot », colloque international 《Transmission et transgression des formes poétiques régulières », Université Chûô, 7-8 septembre 2013.
- (7) Honda Takahisa, 《Michel Leiris: vers la forme poétique simple, ou la Révolution », 国際シンポジウム "Transmission et transgression des formes poétiques régulières", 中央大学駿河台記念館、2013年9月7日。
- (8) 畑浩一郎、「フランス・ロマン主義文学と地中海～灼熱の光を求めて～」、NHK文化センター青山教室 「地中海への誘い～伝統と革新の18、19世紀ヨーロッパ～」 2013年8月19日。
- (9) Nakaji Yoshikazu, 《La traduction et la littérature japonaise contemporaine », Île Maurice, Audi Centrum, 5 août 2013.
- (10) 野崎歆、シンポジウム「観てから読むか、読んでから観るか 文学と映画のあいだ」辻原登、沼野充義、野崎歆、諏訪部浩一、東京大学文学部仏文研究室主催、法文2号館2大教室、2013年7月13日。
- (11) 塚本昌則、「ヴァレリーにおける「フィギュール」概念」、ワークショップ「来るべき修辞学 文学と哲学のあいだで」、日本フランス語フランス文学会2013年度春季大会、国際基督教大学、2013年6月2日。
- (12) 野崎歆、「21世紀のフランス映画 希望のイメージ」福岡ユネスコ協会主催、福岡市総合図書館、2013年6月2日。
- (13) Honda Takahisa, 《La poétique de Michel Leiris », Colloque international 《Soi disant-poésie et empêchement », Université Bordeaux 3, 12-13 septembre 2012.
- (14) Marianne Simon-Oikawa, 《Le musée de Théophile Gautier », ソフィア国際シンポジウム「テオフィル・ゴーチエと19世紀芸術」(上智大学)、2012年5月20日。
- (15) 畑浩一郎、「旅行者ゴーチエと変遷するトルコ」、ソフィア国際シンポジウム「テオフィル・ゴーチエと19世紀芸術」(上智大学)、2012年5月20日。
- (16) Marianne Simon-Oikawa, (avec Claire-Akiko Brisset et Florence Dumora), 《Ecrire en images : les rébus dans les civilisations de l'écriture », Colloque international, 2-4 mai 2012, Université Paris Diderot-Paris, organisation et discussion finale.
- (17) Nakaji Yoshikazu, 《Le poète en prose est-il moderne ou antimoderne ? », Collège de France, séminaire d'Antoine Compagnon, 27 mars 2012.
- (18) Marianne Simon-Oikawa, 《De La Joie à La Lune : les poèmes à voir de Pierre Albert-Birot », Université Paris 3, 23 février 2012.
- (19) 塚本昌則、「ヴァレリーとフロイト 声・仮面・文化への不満」、東京大学文学部フランス文学研究室主催(研究代表者:塚本昌則)による研究集会「フロイトの時代 文学・人文科学・無意識」、東京大学、2011年11月5日。
- (20) 畑浩一郎、「ヤン・ポトツキ『サラゴサ草稿』をめぐって」、地中海学会第35回大会、日本女子大学(東京都)、2011年6月19日。
- 〔図書〕(計38件)
- (1) 本田貴久、『フランス民話集I V』(翻訳)、中央大学出版会、2014年3月、担当「アルザス地方の民話」p. 163-314.
- (2) Marianne Simon-Oikawa(共著), *Le livre espace de création*, Calliopées, 2014, p. 96-104.
- (3) 野崎歆、『翻訳教育』、河出書房新社、2014年、219p。
- (4) 野崎歆、『映画、希望のイメージ 香港とフランスの挑戦』、弓書房、2014年、65p。
- (5) 中地義和、ル・クレジオ『隔離の島』(翻訳)、筑摩書房、2013年、487p。
- (6) 中地義和、「記憶、夢想、フィクションー『黄金探索者』から『隔離の島』へ、『隔離の島』」、筑摩書房、2013年、p. 462-485。
- (7) 塚本昌則(共著)、『写真と文学 何がイメージの価値を決めるのか』、平凡社、2013年10月、377p。
- (8) 塚本昌則、ポール・ヴァレリー『レオナルド・ダ・ヴィンチ論』(翻訳)、ちくま学芸文庫、2013年9月、329p。

- (9) 塚本昌則、「さすらいの詩学 マルグリット・デュラス監督『トラック』を中心に」、『文学と映画のあいだ』、野崎歓編、2013年6月、p. 61-82。
- (10) 野崎歓、「文学と映画のあいだ」(編著) 東京大学出版会、2013年、228p。
- (11) 野崎歓、『フランス文学と愛』、講談社、講談社現代新書、2013年、268p。
- (12) Kan Nozaki (共著), *A Companion to François Truffaut*, ed. by Dudley Andrew and Anne Gillain, Wiley-Blackwell, 2013, p. 388-400.
- (13) 野崎歓(共著)、『写真と文学 何がイメージの価値を決めるのか』、平凡社、2013年10月、p. 96-112。
- (14) マリアヌ・シモン＝及川、『絵を書く』、水声社、2012年、277p。
- (15) マリアヌ・シモン＝及川、『絵を書く』、水声社、2012年、p. 121-142p。
- (16) Marianne Simon-Oikawa (共著), *Poésie vivante - Hommage offert à Arlette Albert-Birot*, coll. « Poétiques et esthétiques XX^e-XXI^e siècle », Champion, 2012, 384 p.
- (17) Marianne Simon-Oikawa (共著), *Poésie vivante - Hommage offert à Arlette Albert-Birot*, 2012年、p. 43-54.
- (18) 中地義和、J・M・G・ル・クレジオ『ル・クレジオ、映画を語る』(翻訳) 河出書房新社、2012年、243p。+索引 ixp。
- (19) 塚本昌則(共著)、『現代社会学事典』、弘文堂、2012年12月。
- (20) 塚本昌則(共著)、『ヴァレリー集成 VI』、2012年7月、p. 226-277。
- (21) 塚本昌則(共著)、『絵を書く』、水声社、2012年6月、p. 203-233。
- (22) 塚本昌則(共著)、『フランス文学講義 言葉とイメージをめぐる12章』、中公新書、2012年1月、240p。
- (23) 野崎歓、イレーヌ・ネミロフスキー『フランス組曲』(平岡敦との共訳)(翻訳) 白水社、2012年、566p。
- (24) 畑浩一郎(共著)、『満鉄と日仏文化交流誌「フランス・ジャポン」』、ゆまに書房、2012年9月、p. 105-121。
- (25) 畑浩一郎(共著)、『フランス文化事典』、丸善出版、2012年7月、p. 376-377, p. 444-445, p. 454-455。
- (26) Marianne Simon-Oikawa (共著), *Translation & Multilingual Literature, Traduction & Littérature Multilingue*, LIT, Berlin, 2011, p. 117-138.
- (27) Marianne Simon-Oikawa (共著), *Ukiyo-e Caricatures*, Beitrage zur Japanologie n°41, Wien, 2011, p. 71-86.
- (28) 塚本昌則(共著)、『別冊水声通信 ジュ

- リアン・グラック』、2011年12月、p. 116-136。
- (29) 塚本昌則、ポール・ヴァレリー『夢の幾何学』、『ヴァレリー集成 II』(翻訳) 筑摩書房、2011年5月、645p。
- (30) 野崎歓、ボリス・ヴィアン、『うたかたの日々』(翻訳) 光文社、2011年、388p。
- (31) Nozaki Kan (共著), *Opening Bazin: Postwar Film Theory & It's Afterlife*, 2011, 324-329.
- (32) Nozaki Kan (共著), *Réception et créativité : le cas de Stendhal dans la littérature japonaise moderne et contemporaine*, 2011, p. 65-74.
- (33) 畑浩一郎(共著)、『フランス文化55のキーワード』、ミネルヴァ書房、2011年、290p。

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕
ホームページ等
<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/futsubun/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

マリアヌ・シモン＝及川 (MARIANNE SIMON-OIKAWA)
東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：70447457

(2) 研究分担者

中地 義和 (NAKAJI YOSHIKAZU)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50188942
塚本 昌則 (TSUKAMOTO MASANORI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：90242081
野崎 歓 (NOZAKI KAN)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：60218310
畑 浩一郎 (HATA KOICHIRO)
聖心女子大学・文学部・講師
研究者番号：20514574
本田 貴久 (HONDA TAKAHISA)
中央大学・経済学部・准教授
研究者番号：50610292